

南大萱の路・川・池

―明治期の「南大萱字限之図」より―

滋賀県大津市の南東部、琵琶湖と瀬田丘陵に挟まれた地域に、南大萱（みなみおおがや）地区は位置しています。現在は瀬田北学区および瀬田東学区の区域にあたるこの地域は、古くから人々の営みが続く土地です。

丘陵と湖に挟まれた地形の上で、人々は自然に働きかけ、暮らしの基盤を築いてきました。瀬田丘陵の源内峠遺跡近くの金糞谷付近に源を発し、地区の中央を流れる長沢川は、かつては天井川であったため、周辺の農地へ配水する機能はほぼありませんでした。そこで人々は、丘陵と平地の境目や、山林と農地の境界に大小様々なため池を築きました。ため池を水源として網の目のように張り巡らされた水路が、南大萱の農地を潤していました。

河川沿いや琵琶湖岸の低地では、古くから稲作が営まれてきました。「五ノ坪」「七ノ坪」といった小字名や整然とした区画形状は、ここが奈良時代の条里制に基づく水田であったことを示しています。

水はけの悪い低地では、琵琶湖へと続く堀が掘削されました。これらの堀は、水田からの余水を排水する役割を担うものでした。また、田への行き来や日々の農作業を支える「田舟」が行き交う水上の道としても利用されました。

人々の暮らす集落は、琵琶湖の増水や水害を避けられる、瀬田丘陵から延びる台地の末端の微高地や、旧東海道沿いに形成されました。そこから東海道などの主要街道、集落から農地に通う生活道路に至るまで、多様な「路」が刻まれてきました。

このように形成された南大萱の景観は、地形の制約を克服するとともに、土地の特性を巧みに活かして築き上げられた、先人たちの知恵と長い年月にわたる努力の結晶です。

かつて農業を中心としていた南大萱は、近畿圏のベッドタウンとして農地が宅地となり、長沢川も改修されるなど大きく姿を変えました。そうした新しい街並みの中にも、かつての水路やあぜ道は住宅地の区画や暗渠として今もひっそりと息づいており、この地で連綿と続いてきた暮らしの証を留めています。

南大萱資料室と龍谷大学は、失われつつあるこれら過去の景観を復元し、記録に残す活動に長年取り組んできました。本資料は、『南大萱 路と川』（平成25年）、『南大萱の地名』（平成28年）に続く成果となります。本図は、南大萱地区に保管されてきた『南大萱字限之図』を基に作成しました。明治期の詳細な土地利用が描かれたこの絵図と、往時の航空写真を照合することで、当時の道、水路、堤防の姿を現在の地図の上に再現したものです。

この地図が、皆様の記憶を呼び覚ますきっかけとなれば幸いです。便利になった現代の暮らしの中で見過ごされがちな、足元の歴史と風土の豊かさを、この地図を通して再発見していただければと思います。本図により、過去の景観と現在が重ね合わさり、かつての人々の暮らしと現在、そして未来の暮らしが結びつくことを願います。

南大萱の路・川・池―明治期の「南大萱字限之図」より―

2026年3月31日 発行

著・作図：林珠乃（龍谷大学先端理工学部）・高橋三喜男（南大萱資料室）・杉本久典（南大萱資料室）

発　　行：南大萱資料室（〒520-2144 大津市大萱2丁目18−31）

印　　刷：富士印刷

© 2026 林珠乃・南大萱資料室
本資料のデジタル版は龍谷大学の学術レポジトリからダウンロードできます。

村を流れる川

ながそ 長沢川	地元では「ながそ川」と呼ばれてきた。かつては天井川であり、大雨による災害が多発した。昭和28（1953）年の台風被害を契機に、昭和30年から36年もの歳月をかけて改修が行われ、天井川は解消された。改修前は約4.58kmあった流路は、直線化により4.1kmに短縮された。現在は一部区間（738m）が準用河川「ながさわ川」に指定されている。
とのだ 殿田川	河口部に大きな船溜まりを持ち、さらに川の途中にも二箇所の船溜まりがあった。漁業や農業用水（湯水時の貯水）に利用され、往来には「艫（たい）」と呼ばれる細長い木船が使われた。芦浦道辺りから上流の水路は川幅が狭く、それより下流の殿田川は川幅が約2間（約3.6m）以上と広かったことから、人工的に掘削された掘割（ほりわり）であった可能性がある。
まるお 丸尾川	現在のびわこ文化公園北側の「水取喧嘩場」付近を源流とし、月輪側と分流して南大萱側を流れる。丸尾池の南側を西流し、小字四反田から山ノ神を通り、山ノ神池の西側から旧東海道沿いに南下して長沢川に合流する。延長は1.5km。流路が直線的であるため、砂留めの目的で数箇所に蛇籠が設置されていた。
ますい 増井川	月輪池と山ノ神池の水を合わせ、小字葛原や増井の田地を潤して殿田川に至る川。小字河原には、「だんご橋」という橋がかけられ、「だんご橋の川」として親しまれていた。だんご橋付近は子供たちの水遊び場所でもあった。
わくい 椋井川	本願明池を水源とし、宮ノ口、藤ケ森から大町沿いに小字北出を縦断して貴船神社の大萱浜へ流れる川。長沢川西側の田地に水を供給していた。
おばた 姥田川	宮ノ口の正林坊池を起点とし、善念寺北側から浜街道を横切り大萱浜に至る。

水路と掘割

南大萱の地域内には、農業用の水路や掘割が網の目のように張り巡らされていた。その役割は地形によって異なり、台地部では「配水」、低地部では「排水」が主となっていた。

瀬田丘陵から延びる台地部では、ため池を起点として、傾斜に沿って水田に水を配るための水路が整備された。丸尾池の水は主に小字四反田・月輪へ、長尾池の水は小字新林・茶屋前へ、石拾池の水は小字新朝倉・焼野から萱野神社近くの小字東野までの水田へと供給されていた。

一方、湖岸の低地には数多くの掘割が掘削されている。この地域は琵琶湖の水位と連動するため地下水位が高く、土壌は肥沃である一方で水はけの悪い泥田であった。そのため、余分な水を排出するための掘割が不可欠だった。小字広畑・田殿・草川には、「代官堀」と呼ばれる幅約1～2間（約1.8～3.6m）の直線的な大溝が整備されていた。その流路は、天保5（1834）年に干拓された大久保新田よりも内陸側に及び、同年に作成された「大久保新田見取り図（南大萱区有文書）」には描かれていないことから、大久保新田干拓前後の掘削と推測される。また、小字運原や小殿の田では、排水路である掘割に「田舟」を浮かべ、田への行き来だけでなく、日々の田仕事にも利用していた。浜口の常夜灯が現在ある場所には、かつて「大萱浜」と呼ばれる港があり、大津や湖岸の町村に通う湖上交通の拠点として機能していた。

街道

古代東山道	7世紀後半に整備された古代律令による官道の一つ。近江から内陸を通り東北に至る。近江国府（現・大江）を発し、現在の東レ瀬田工場付近から南大萱小字中筋に入り、善念寺手前で北東へ折れて草津市南笠に抜ける。幅員は約12mあったとされるが、9～10世紀に官道としての役割を終え、道幅は狭くなった。
旧東海道	江戸時代に整備された五街道の一つ。草津宿と大津宿の間の区間が南大萱を通る。当時の道幅は6間（約10.8m）で、両側には松や桜が植えられた砂利道であった。旅人の道標として1里（約4km）毎に塚が築かれ、昭和51年には学園通りとの交差点に「一里塚址碑」が建てられた。この碑の石台は、かつて現東レ前の浅川に架かっていた石橋が転用されたものである。
あしうら 芦浦道	旧東海道久保江の高橋川の東側を起点とし、ほぼ湖岸に沿って草津市の芦浦観音寺を参詣する目的で造られた道である。久保江城址の西側から現在の東レグランド中央を通り、南大萱小字織部に入り、長沢川を越えて草津市新浜に抜ける。

村の生活道

朝倉道	旧東海道の赤兀道から古朝倉、焼野を経て、新朝倉を通り石拾池・大池に至る道。現在の「学園通り」とほぼ重なる。砂利道ではなくとも道でぬかるみやすく、大八車で坂を上るには人の助けが必要な難所でもあった。
赤兀道	萱野神社横、かつての「あかはね踏切」付近から、旧東海道の「一里塚址碑」までを結ぶ道。
丸尾道	一里山道を旧東海道で受け、長沢川沿いの小字新林の田地を経由し、山ノ神から丸尾池方面に通じる道。
一里山道	中筋道の万福寺鐘楼下から四辻の地蔵さんを曲がって東に進み、萱野神社の北側から本願明池の東側を旧長沢川沿いに旧東海道に至る道。小字丸尾や新林から、大萱浜まで米や苧を運ぶ最短ルートとして利用された。
もたれ道	小字小柊木の長沢川から北東へ、養老川までの農道を言う。周辺の「もたれ」という地名にちなむと考えられる。
だんぎゃ道	かつての「神輿（みこし）道」である。5月の萱野神社の祭礼で、神輿が藤ヶ森神社から宮ノ口や東野の御旅所へ巡行する際に通った。道というより「ぬた道」であった。「だんぎゃ」の由来は定かではない。
浜道	大萱浜から通徳寺横にある東山道の三叉路までの道。購所藩の米倉へ納める南大萱の年貢米の運搬等に使われた。浜から約300mの場所には、藩の命令を掲示し周知するための「高札（たかふだ）場」があった。

作図の方法

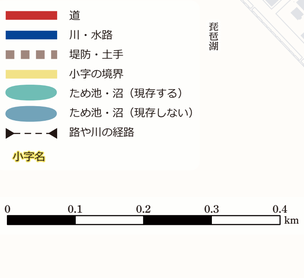
本図の作成にあたり、基礎資料として南大萱資料室が保管する『南大萱字限之図（みなみおおがや あざぎりのず）』を使用しました。

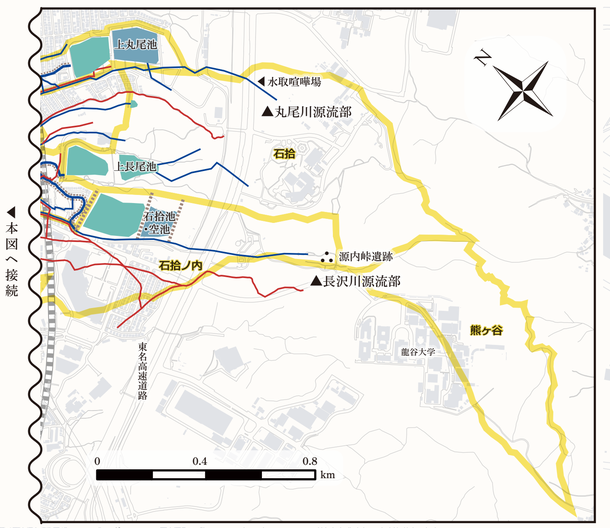
【字限之図と原図の推定】使用した資料は、『南大萱字限之図　昭和四十一年十二月　南大萱区』と題された冊子です。南大萱全域を68の小字ごとに区分して描いた地図で構成されており、地域内での土地管理や境界確認の実務に利用されてきました。各図は一律の様式で描かれており、小字内は地番が付与された筆ごとに区切られ、路は赤線、川や水路は青線、堤防は茶色の線で彩色されています。

また、各図には小字名と共に「栗太郡南大萱村字限之図」という表記があります。「南大萱村」という行政区分が存在したのは明治7（1874）年から明治22（1889）年の間であることから、元となった原図はこの期間に作成されたものと推察されます。昭和41（1966）年の冊子は、その明治期の原図を複写し、彩色して縦に合わせたものと考えられます。残念ながら原図の現在の所在は不明であり調査を継続中ですが、本資料は明治初期における水路や道の状況を詳細に伝える、極めて資料的価値の高いものです。

【復元の手順】復元作業においては、この「字限之図」と、宅地化や圃場整備が本格化する以前の昭和22（1947）年および昭和36（1961）年に撮影された航空写真を照合する手法をとりました。航空写真に写る当時の畦畔や路や水路と、字限之図に描かれた形状を綿密に対比させることで、小字の境界、水路、路、堤防の位置を画定しました。また、当時を知る地元住民の記憶も参考にしました。本図は、こうして復元した情報を現在の地図（国土地理院・基盤地図情報データを使用）に重ね合わせたものです。

なお、本図の作成にあたっては、航空写真や現地の痕跡を手がかりに慎重に位置を補正しましたが、あくまで「推定復元図」であり、厳密な境界を示すものではないことをお含みおきください。





◀本図へ接続

▶分図へ接続